

〔書評〕

## 二本松康宏著『曾我物語の基層と風土』

小井土 守 敏

著者、二本松康宏氏との出会いは、九〇年代前半の頃であつたらうか。学会会場にて、とある先生に、『曾我物語』を研究する大学院生同士としてお引き合わせいただいたのである。当時、人物造型論に重きを置いていた稿者は、氏が口にした「フィールド・ワーク」というものと『曾我物語』とを、うまく重ね合わせる事ができず、その研究方法に強く関心を持った。また氏は、曾我兄弟が仇敵工藤祐経を付け狙つて密かに同行した北関東の狩庭跡を実際に巡っているのだと語るのに、たまたま稿者の出身地であることを明かすと、ひどく恐縮されていたことを記憶している。その謙虚な姿は、氏の第一印象であると同時に、その後も研究者としての氏の印象であり続けている。おそらくはその姿勢のまま、それぞれの調査地で土地の人々から聞き取りを行っているであろう氏の姿を想像した。そして当時のフィールド・ワークの成果は、「真名本『曾我物語』北関東狩庭巡りの連算意識——二つの名譽譚をめぐる——」（『論究日本文学』第62号、一九九五年五月、本書第一編第二章「三原野と那須野をめぐる狩庭の祭祀

者たちの名譽」に改題して再録）となり、間もなくその抜き刷りが稿者の手元に届くことになる。

その後も、互いに駆け出しの研究者だつた頃から——氏は稿者の何歩も先を歩かれていたが——現在に至るまで、発表される御論考はことごとくお送りいただき、稿者は多くの刺激を受けた。そして今回、それらが一冊の研究書として編まれたのである。稿者にとつて本書を読むことは、自らの研究生活を顧みることでもあつた。各論を読み進めるうち、かつて初出論文として読んだころのことが思い起こされたからである。

ただし本書は、単なるアンソロジーではない。随時発表された各論は、序論、第一編「狩庭の物語」、第二編「道々の物語」、第三編「鎮魂の基層」、付論として整理され、氏のこれまでの研究成果が一つの大きな主題に貫かれるように配されている。併せて、大小の加筆修正が施され、初出以後の学会の研究成果や自身の研究の深化も丁寧に反映されており、研究者としての真摯な態度がうかがい知れる。本書は「論集」ではなく、二本松氏の構

築する研究の「大系」であると言えよう。

序論「若武者の武勳」において、著者は、曾我兄弟の敵討ちの法——とどめの作法に、狩猟の場面における文化・信仰を見いだす。このことが、本書の出発点として設定される。そして本書が目指すものとして、「物語としての構想の解明」を謳う。こうして読者である我々は、氏の「物語の生成基層を支える環境文学という考え方」に導かれるように、『曾我物語』という作品を、これまでになく切り口で読み進めていくことになるのである。

第一編「狩庭の物語」、その第一章「河津三郎最期の風景」において、さっそく我々は、著者の基本的な研究スタイルに触れる。すなわち、敵討ちの端をなす曾我兄弟の父河津三郎が討たれた地について、旧来の伝承を整理し、その矛盾を指摘したうえで、新たなその位置の比定を試みる。歴史地理的なデスク・ワークを丹念に行ったあと、著者の足はフィールドへ向かう。現地調査に基づくその検討は、「推測」でありながら種々の状況証拠を積み上げ、説得力を持つ。著者の研究スタイルの基盤がそこにあるのである。そして本章においてあらためて、『曾我物語』という作品は「狩庭の論理」に支配されているのだということが提唱される。以降、各論でそのことが丹念に論証されていくこととなる。

第二章「三原野と那須野をめぐる狩庭の祭祀者たちの名譽」では、源頼朝が催した北関東の巻狩り記事に見える、三原野におけ

る海野氏の名譽譚、那須野における宇都宮氏の名譽譚に着目する。なぜその地において、なぜその一族なのか。考証は鎌倉初期から近世まで至り、それぞれの土地の必然性と、当該二氏の妥当性があぶり出されていく。それは、諏訪・宇都宮といった北関東一円に根付いていた狩猟信仰に基づくものであり、それぞれの土地で祭祀を自称し、かつ認識された氏族であったと結論する。

本章において、著者は以下のように指摘する。

物語の構想背景は、同時代の読者ならば誰でも気が付くような類のものであるはずだと私は考えている。物語の仕掛けや伏線といったものは深層に潜みつつ、それでいて意外と素朴なものではないか。

著者は同章のなかでこうも記している。

それは中世の読者ならば誰もが知っているようなことだったはずである。伏線や構想は、実は誰にでもすぐにわかるものでなければならぬ。

これらも、本書における重要な視座として、我々読者は胸に刻むことになる。そして著者は現代の我々のモノサシによる主観的な評価を厳しく戒めるのである。

第二編「道々の物語」に収められた三編の各論では、物語を生み、あるいはたぐり寄せ、そして育む土地の力が論じられる。

例えば、その第三章「法皇宿逗留譚の風景」では、先行研究において「未詳」とされた「法皇宿」の比定を試みる。そして、記録や実測からすれば「現実味」に欠けるその比定地について、そ

の土地の力と『曾我物語』の志向について言及する。その中で、著者は再び我々読者に覚醒を促すことばを發する。すなわち、

真名本『曾我物語』は、那須野からの帰途に『吾妻鏡』の事實を受け入れず、一方で仮名本にはない旅の足跡を遺した。

それが真名本の志向した「足跡」である。それは断じて「現実味」ではない。(略)そのような現実味の評価の仕方、真名本『曾我物語』を読み解くうえで実はあまり意味がない。たとえば富士野への最期の旅に際して、曾我の里から駿河国小林の里までを一日とする曾我兄弟の足取りは、箱根の峠を越えておよそ八〇km。最期の旅では兄弟は馬を駆っているが、その馬はかならずしも八〇kmの移動に現実味を持たせるために用意されたものではあるまい。たとえその八〇kmの行程を一日に歩いたとしても、それには真名本の求めた足跡が目的としてある。曾我兄弟は小林の里の日逼の狩座で頼朝に追いつかなければならないのである。それによって曾我御霊示現の伏線が仕掛けられる。真名本の志向した在地の真実とは、元来、そのようなかたちものではなかったか。

「事実」を『吾妻鏡』に頼らざるを得ないという現状はあるが、『吾妻鏡』の資料としての問題も一方では存在するわけで、その記述を論拠としてあげればあげるほど、問題がループ状態に陥ってしまうのではないかと不安はある。しかし、『吾妻鏡』の記述が「現実味」を持つ以上、それと異なる記述を有する真名本

『曾我物語』とにおいて、その相違の意図は検証されるべきであろう。そしてその検証を通して、著者はそこに、事実考証あるいは「現実味」を超越しうる土地の力、環境の力を認めるのである。その態度は、我々の觀念として存在する、事実考証を第一とする注釈態度と真つ向から対立する。こうした論証に接し、我々は、いわゆる「在地性」とは何かということを目問する。地名に精確であることや物理的空間として齟齬がないことばかりが在地性ではないのではないか。その土地の属性や習俗までも含め——それらはしばしば物理的空間をも歪めうる——精通しているということが、在地性を持つということなのだ。こうした「気づき」が、本書には随所にあるのである。なお、引用中にある小林の里であることの必然性は、第三編第四章「小林郷における曾我御霊の昇華」にて詳細に論じられることになる。

第三編「鎮魂の基層」においては、敵討ちを遂げ、命を落とした兄弟の魂鎮めのために、物語が周到に仕組んだいくつかの仕掛けについて論証し、総体として、曾我兄弟の鎮魂へと収斂していく物語の構想を説明していく。

兄弟の富士野への出で立ちを「七騎落ち」になぞらえることは、兄弟の宿願である敵討ちの成就を保証し、予祝するものであるということ。兄十郎祐成を討ち取った人物、仁田忠経は祐成を討つための「資格」をその前段階においてすでに与えられていたこと。同時にそこに仕組まれた狩庭の理論。兄弟絶命の地や「屍処」、または兄弟が御霊として昇華するための小林郷という土地

の必然性あるいは妥当性。そうしたことが次々と明らかにされていく。そしてそれらの必然が、『曾我物語』の作品世界を構想する「風景」なのだと著者は言う。

本書の『曾我物語』の読みは、新しい試みに満ちている。そもそも物語そのものが「狩庭の論理」に基づいて構想されるという前提によって、『曾我物語』を読み解いていくのである。著者の民俗学的調査と歴史地理的検証の積み重ねに、我々読者はしばしば説得され、著者の流麗かつ挿るぎない文体が構築する論理に、我々は引き込まれ、多くの新しい知見を獲得する。ただし、それらの論理は前提すなわち仮説に基づいていることを忘れてはならない。はたして氏の論理、あるいは研究の大系は、我々読者にある決断を迫る。つまりその前提を受け入れるか否か。伸るか反るか、である。

『曾我物語』は言うまでもなく、幼い頃に父を失った兄弟が、艱難辛苦の末に父の敵を討ち果たしたという、敵討ちの——あるいは孝子の物語である。殊に真名本においては、頼朝の東国難伏時代をも詳細に描き、苦難の末の本望遂行という、いわば大業を成すためのある雛型を、読み手に示してくれる物語でもある。そうした物語の叙述や構想の基層に、「狩庭の論理」がすり込まれているというのである。この前提に立って、『曾我物語』はあらためて読み直すことができるということを、著者は我々に示してくれているのである。

この前提をいかに受け止めるか。読者にとつての本書の価値は、その決断を行うことにあると言える。稿者はもちろん、よるこんで「伸つてみたいと思う」。

いささか回顧ふうな記述を含みつつ、以上をもつて氏の著書の書評としたい。

(二本松康宏『曾我物語の基層と風土』三弥井書店、二〇〇九年二月、本体七、八〇〇円)

(こいど・もりとし 大妻女子大学文学部准教授)